



特集

布からみえる
インド世界

躍動する布 上羽陽子

衣服がつくりだすつながり 濱谷真理子

手仕事とは何か? 金谷美和

トライブ・アイデンティティとしての布 岡田恵美



目次

- 1 エッセイ 千字文
布掛けの小屋と葉っぱのお皿
西岡 直樹
- 特集**
布からみえるインド世界
- 2 躍動する布
上羽 陽子
- 4 衣服がつくりだすつながり
——インド・ハリドワールの女性出家者
濱谷 真理子
- 6 手仕事とは何か？
——グローバルに展開する布、アジュラク
金谷 美和
- 8 トライブ・アイデンティティ
としての布
岡田 恵美
- 10 みんぱく回遊
展示場でジェンダーを考える
宇田川 妙子
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 ○○してみました世界のフィールド
二度と闘牛はしません
関 雄二
- 16 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界
沖島漁師、かごを編む
渡部 圭一
- 18 シネ倶楽部 M
頭のなかのパンデミック
——「アウトブレイク」
高木 仁
- 20 ことばの迷い道
所有表現のいろいろ
岡本 進
- 21 編集後記・次号の予告

表紙

一枚布を多様な方法で着用している牧畜民男性たち
(撮影:上羽陽子、インド、グジャラート州、カッチ県、1998年)

布掛けの小屋と葉っぱのお皿

西岡直樹

新型コロナウイルスがインドに蔓延する少し前、西ベンガル州の農村にある私たちの染織工房の隣家の女主人が突然亡くなった。彼女はとりわけ信心深いほうではなかったが、習慣として、朝起きるとまず、庭に出て、シソ科の多年草のカミメボウキが頂に植え込まれた煉瓦造りの祭壇の前と、戸口の前の地面を、水で溶いた牛糞でまるく円を描いて清めることから一日を始めていた。ヒンドゥーの人達が神聖とみなす牛糞で描かれたその円は、マルリといって、吉祥の女神ラクシュミーが降り立つ場である。彼女はそれを描いている最中に、突然倒れたのである。

骨組みに薄い綿布を張り巡らせたにわか作りの小屋が設けられ、並べられたテーブルにはすでに大勢の顔見知りの村人が着席していた。白い綿布によって和らげられた陽光が中を優しく照らし、それぞれの席には葉っぱのお皿が置かれていた。一〇枚ぐらいの沙羅双樹の葉をイネ科の草の茎で円形に綴じ合わせたお皿である。この葉っぱのお皿は、北インドでは町の食堂などでも日常的に使われている。喪主であるシングルマザーの長女と未婚の弟が見守る中、近所の男たちが給仕に駆け回っている。まず、熱いご飯が乾いた葉っぱの上に盛られると、湯気とともに沙羅双樹の葉のかぐわしい匂いが立ち上った。それからダール(豆スープ)がご飯にかけられ、野菜カレー、

魚のカレーと次々に盛られた。私たちはそれを頂き、最後に甘いミルク菓子を食べて席を立ち、手を洗いに外へ出た。

すると、ついさっきまで客と歓談していた長女が、幕の裏手に突き立つ水道の蛇口に手を掛けたまま泣いていたのである。目からは止めどなく涙がこぼれ落ち、幼い息子が心配して顔を覗き込んで、自分にもどうすることもできないかのように、ただしくしくと泣いていた。そして泣くだけ泣いてしまつと、またいつもの晴れやかな笑顔にもどって、帰る客を送り出しはじめた。

この一年半インドには行けないでいる。私はときどき、乾いた沙羅双樹の葉っぱのお皿の香りとともに、幕の背後で泣いていた彼女が、最後に見せたあの晴れやかな笑顔を思い出す。そして思う。あの笑顔のこの上なくさっぱりとしたすがすがしさは、遺骨に重きを置かず川へ流し、遺品にもさして執着をもたないヒンドゥーの人々の「生の捉え方」からくるものなのだろうか。

プロフィール

1946年宮崎県生まれ。エッセイスト、インド植物文化研究者。宇都宮大学農学部卒業後、インド西ベンガル州のピツショ・パロティエー大学、ジャドププル大学ベンガル語学科に留学。民話や植物に関する話を集め、今に至る。1989年インド西ベンガル州に植物染色、織りの工房を設立。著書に「定本 インド花織り」、「とっておきインド花織り」(ともに木犀社)、「インドの樹、ベンガルの大地」(講談社)などがある。

布からみえる インド世界

現在開催中の企画展「躍動するインド世界の布」では、人生儀礼における贈与品、神がみへの奉納品、社会運動のシンボル、グローバルに展開するインド産の布など、さまざまな機能や役割をもつインド世界の布を展示している。本特集では、それらの布と人びとの営みについてインド各地の事例からみてみよう。

企画展「躍動するインド世界の布」
会期：2022年1月25日(火)まで
場所：本館企画展示場

躍動する布

上羽 陽子

民博人類文明誌研究部

MINDAS布班

着るだけではない布の役割や機能に注目した共同研究をしよう。二〇一七年一〇月、「MINDAS布班」の研究の方向性が決定した。

MINDASとは、南アジア地域研究 国立民族学博物館拠点（代表：三尾稔）の略で、大学共同利用機関法人人間文化研究機構が進める地域研究推進事業のひとつである。そのなかの分班のひとつ「布班」では、どういった方向で共同研究を進めるか悩んでいた。班のメンバーの専門分野は、

インドを中心とする南アジア地域における文化人類学や地域研究、民族芸術学、美術史など多岐にわたっていた。筆者以外は布専門の研究者ではない。だとすれば、このメンバーだからこそ可能な共同研究があるはずだ。

布の多様性と普遍性

わたしたちの社会において、元来、布は人びとの生活と密接した関係にあり、衣服としてだけではなく、人生儀礼における贈与、貨幣としての流通といった多様な役割や機能を担ってきた。とこ



昭和堂より刊行された。

展示は、「場をくぎり、人をつなぐ布」「神にとどく布」「政治をうごかす布」「布がうみだすグローバル経済」の四章構成となっている。

第一章の「場をくぎり、人をつなぐ布」では、聖なる空間をくぐる、自己と他者をくぐる、人と人、社会と社会をつなぐ布を紹介している。インド世界の布の多様な様態は、多宗教、カースト制度、数百を超える言語といったインド社会の多様性をあらわしているようである。人びとは異なる価値観のなかで、多元的に交じり合いながら、それを原動力として現在の躍動するインド社会を支えている。このような多様性を共存させるために、人びとは自己と他者を明確に区別し、適度な距離を保ってきた。その際に、布は大きな役割を担ってきた。また、布は貴重であるため、結婚儀礼や人生儀礼の贈り物などにも使われ、人と人をつなぐ重要な役割も担ってきた。

第二章の「神にとどく布」では、宗教儀礼や日々の祈りの場における布の役割や機能に注目

している。インド世界における信仰は、聖なる存在と交流することに重きをおいている。人びとは日常のなかで神とつながり、聖なる力を頼りにしてきた。その際、人びとは布を神に捧げ、神に布をまかせ、そしてその布をおさがりとして自身のお守りとしてきた。

第三章の「政治をうごかす布」では、メッセージ性をもった布についてとりあげている。社会運動にも使われ、インド独立運動においては手紡ぎ手織り布が民族独立運動のシンボルとして活躍した。はためく布は忠誠や抗議を標す旗などとして利用され続けてきた。

第四章の「布がうみだすグローバル経済」では、インド産の布や衣装のグローバルな展開について紹介している。インドの布は世界の一体化が進んだ大航海時代以降、とりわけ東インド会社がおかれた一七世紀から産業革命が進行した一九世紀にかけて、ヨーロッパをはじめ、世界各地において熱狂的な流行を巻き起こしてきた。希少な素材や目新しい文様などが移動することによってあらたな美的価値をうみだし、交易品として扱われてきた。

インド世界の布は、場をくぎり、人をつなぎ、神と人の媒介となり、政治をうごかし、グローバル経済をうみだす。このように躍動する布の現場に光を当て、布の役割や機能を明らかにすることは、グローバル化が進む現代インドの社会や文化の持続と変容の動態をひもとくことにつながる。本特集では、企画展と連動して、布からみえるインド世界を紹介する。

手紡ぎ手織り布と紡ぎ車はインド独立運動の象徴となった。M・K・ガンディーが創設した学校では、毎朝、祈りの後の糸紡ぎを日課としている(グジャラート州、アフマダーバード、2009年)



インド西部に居住するラバーリーの女神の祠(ほこら)には、女神の祭礼日にだけ儀礼用刺繍布トランが捧げられる(グジャラート州、カッチ県、1998年)



花嫁衣装としてかかせない絞り染め布。花婿親族から花嫁へ贈られ、夫が存命中、嫁としての社会的地位を示す衣装とされる(撮影：金谷美和、グジャラート州、カッチ県、2006年)

た、布は貴重であるため、結婚儀礼や人生儀礼の贈り物などにも使われ、人と人をつなぐ重要な役割も担ってきた。

衣服がつくりだすつながり

—インド・ハリドワールの女性出家者

濱谷 真理子

京都大学大学院特任研究員

インドの女性出家者

一般に、インドの出家者というと、ドレッド・ヘアに豊かな髭をたくわえ、サフラン色の僧衣を身にまとった男性行者の姿が思い浮かぶかもしれない。古来より尼僧制度が確立されていた仏教やジャイナ教と違って、ヒンドゥー社会における女性の出家は近代まで制度化されず、現在でも女性には出家者全体の10〜15パーセントと少数にとどまっている。法典で知的・精神的に男性よりも劣っているとされる女性は、正統な出家者とみなされてこなかった。世間でも寡婦や結婚に失敗した者など社会的逸脱者の女性が、生活のためにやむをえず出家をするというような、ネガティブなイメージが浸透している。その一方、民間信仰においては少なからぬ女性聖者が存在し、マター=母なる女神として尊ばれてきた。このことから、女性出家者は聖俗併せもつ両義的存在といえる。

施食会と衣服

出家の実践において核心となるのは僧衣だ。例



出家者の正装であるクルター・ドーティー (マハーラーシュトラ州、トリンバク、2015年)



チョーラーやジャンガーとよばれるチュニック型上衣 (ウッタラーカンド州、ハリドワール、2013年)

はパールヴァティー女神の経血に由来するとされる。かつて行者たちはゲール(赤土)を用いて、数日かけて染色した衣服を着用していたという。しかし、現在では行者の多くは合成染料で染色された市販の布や、もしくは安価で手軽な化学原料由来の色粉を購入し、自分で白い布を染めたものを用いる。それらの布は、ゲールカラーとは違ってたいいて鮮やかなオレンジ色やサーモンピンク色である。ゲールカラーに準ずるようなそれらの色を総称して赤系とよび、赤系の僧衣をバグワーとよぶ。行者社会では、僧衣の色はそれぞれの帰属を識別する目印として働くが、バグワーはおもにシヴァ派行者が着用する。

出家者の装い

では、赤い服さえ着ていれば出家者とみなされるかといえば、そういうわけでもない。衣服の形態もまた判断の基準となる。どのような形態の僧

えば、行者のあいだでは出家を、世俗放棄をあらわす「サンニヤース」ということばよりも「僧衣を着用する」などと表現する。それでは、僧衣を身につけることで、具体的に女性たちはどのように出家者へと変容していくのだろうか。

一例を挙げよう。わたしの調査地である巡礼都市ハリドワール近郊で暮らす女性行者の多くは、毎日夕方になると、ある修行道場が実施する施食会へと出かけていった。そこでは道場側が出家者と認める者だけをなかに入れて食事を提供し、それ以外の者には門前で炊き出しを配っていた。女性行者の場合、適切な赤系の僧衣を身につけた者だけが入場できるようになっていた。赤が出家者を象徴する色であるのに対し、白いサリーは寡婦が着用することが多く、白=寡婦とみなされるためだ。では、赤系の僧衣とはどのようなものを含むのか。

ゲールカラー

一般的に、出家の象徴とされるのがゲールカラーとよばれる赤褐色だ。ゲールカラー

衣を着用するかは宗派や出身地によって異なるが、男性行者同様にクルターとよばれるチュニック型上衣とドーティーとよばれる足首までの長さの腰巻を着用するのが出家者の正装とされる。ほかに、女性行者に好んで着用されていたのがチョーラーやジャンガーとよばれる足首まですっぽり隠れるような長いチュニック型上衣(ガウン)である。赤いサリーも出家者の衣服に含まれる一方、在家女性の日常着であるシャルワール・カミーズ(チュニック型上衣と裾の膨らんだズボン)は施食会で禁止されていた。

出家者になる

以上のような僧衣のドレスコードに則って、ある者は白いサリーから赤い僧衣に替え、別の者はシャルワール・カミーズからクルター・ドーティーへと着替えて施食会に参加するようになった。そして、日々施食会に参加するうちに、見かけだけ



施食会が始まるまで修行道場前で待つ女性行者(ウッタラーカンド州、ハリドワール、2013年)

でなく言動やしぐさも出家者にふさわしいものへと変化していった。例えば、施食会には乞食で生計を立てている貧しい女性たちも参加していたが、彼女たちも在家者の象徴である鼻ピアスや装飾品を外して適切な装いを習得し、手かざしや真言によって在家支援者に祝福を与えるなど出家者としてふるまうようになっていった。そして、施食会に滞りなく参加できるよう身なりを注意し合うなどして相互に配慮し、女性行者仲間とのあいだに連帯関係を築いていったのである。出家が衣服を替えるのではなく、衣服が人を変えることもある。

出家者は外出時にチャールとよばれるショールを羽織る。男性行者の場合は、折りたたんだ布を肩にかけるスタイルが多いが、女性行者の場合は肩に巻きつけたり、全身を覆ったりと着こなしに気を配る(ウッタラーカンド州、ハリドワール、2013年)

手仕事とは何か？

—グローバルに展開する布、アジュラク

かねたに
金谷 美和

国際ファッション専門職大学准教授

わたしは、インド西部グジャラート州カッチ県で、アジュラクの産地を二〇年にわたって調査してきた。アジュラクとは、イスラーム教徒の牧畜民男性が腰布、頭巾、肩掛け布として着用する布である。

震災後に有名に

アジュラクは、近年国内外で急速に有名になっている。きっかけは、二〇〇一年に産地が大規模地震の被災地になったことである。生産者たちは、

工房設備などに甚大な被害をうけ、新村を建設して産地の移転をおこなった。移転計画に国内外から支援が集まり、さらに新村にアジュラクの名前がつけられたために、アジュラクは知名度を高めた。アジュラクは、カッチ県を代表する手工芸のひとつとみなされるようになった。それは、震災復興の一環でおこなわれたカッチ県の観光促進のイメージとして、ナレンドラ・モーディー首相が、アジュラクのターバンを着用している姿が使われたことにもあらわれている。

それに伴って、国内外のフェアトレードショップやアパレル会社から、アジュラクの技法や文様をもとにした生地が発注されるようになり、それらはアジュラクという商品名で流通した。そのおかげで染色業は回復し、新村への移転も順調にすすめられた。

本物のアジュラクとは

しかし、有名になるにしたがって、コピー商品が出回るようになった。生産者たちは、産品の名称を知的財産として保護する地理的表示（GI）制度にアジュラクを登録した。さらに彼らは、本物ではないとみなすアジュラクとの差異化を



木版捺染でアジュラクを製作している。染色後にさらに媒染剤と防染剤の押捺、染色を繰り返すことで色に深みをだす(2016年、写真はすべてグジャラート州、カッチ県)

はかるようになった。

彼らに本物でないと思なされたのは、スクリーンプリントで製作されたものである。GI登録の中心となったイスマイル氏は、アジュラクには「木版を手で捺す工程」が不可欠だと述べ、スクリーンプリントで製作されたものは、本物とはいえないと断言した。つまり、本物かどうかを区別する指標として、木版を使った手仕事であるかそうでないか、ということが焦点化さ

れたのである。

産地では、布に模様をつけながら染める方法として、木版捺染とスクリーンプリントというふたつの技法が用いられてきた。木版捺染は、模様を彫り込んだ木版に防染剤や媒染剤をつけて布に捺した後、染液で浸染する。スクリーンプリントは、模様部分に孔をあけ、透過するように加工した紗を枠に張って、作られた版を布の上において、その上から糊状の染料を刷り込む。

このふたつの技法の工程は手作業が主であり、例えば日本ではスクリーンを自動送り装置に取り付けたもの以外は、スクリーンプリントも手仕事だとみなされることが多い。染色方法は機械工法だとみなされるが、インドで木版捺染だけが手仕事だとみなされているのは、行政の施策によるところが大きい。一九七〇年代に農村における小規模産業復興をめざす手工芸開発事業がこの産地でも始まり、補助金の対象者を選定するために生産者についての調査がおこなわれた。そこで、手工芸開発の対象業種はリストで明確に示された。木版捺染は対象だが、スクリーンプリントは対象にならなかつたために、生産者たちのあいだで、スクリーンプリントは手仕事ではないという認識が浸透したのである。

手仕事のイメージ

アジュラクの商品としての魅力は手仕事にあるという認識は同じでも、生産者と消費者では、それぞれに手仕事のイメージが異なっている。知的財産権を主張するアジュラクの生産者にとっては、



スクリーンプリントでアジュラクを製作している(2007年)

木版捺染で製作することが重要であるが、多くの消費者にとっては木版捺染とスクリーンプリントの違いはそれほど重要ではない。そのような消費者にとっては、伝統を受け継いだ職人が製作し、伝統的な色柄がついていることが手仕事の証なのである。このようなイメージのズレが、アジュラクをより広い購買層に届けることになり、アジュラクの知名度を支えているのである。



アジュラクのターバンを着用したナレンドラ・モーディー首相が印象的な看板(2015年)



アジュラクを肩に掛けるイスラーム教徒 牧畜民男性(2008年)

岡田 恵美 おくだ えみ
民博 人類基礎理論研究部

ナガ・トライブとは

インド北東部の山岳地帯には、インド憲法第三四二条に基づき、「トライブ」に指定された少数民族が多く暮らしている。なかでもミャンマーと国境を接するナガランド州は、「ナガ」と称する人びとが州人口の八割以上を占め、ナガランド州政府は彼らを一四の異なるナガ・トライブとして公認している。各ナガ・トライブは州の共通語であるナガ語と同時にトライブ特有の言語を日常的に使い、農村部のみならず都市部でもトライブ内での連帯意識は強い。ナガ社会では、プロテスタントのバプテスト教徒が約九割にのぼり、各トライブのバプテスト教会の存在がトライブの言語やコミュニティの維持に直接関与している。

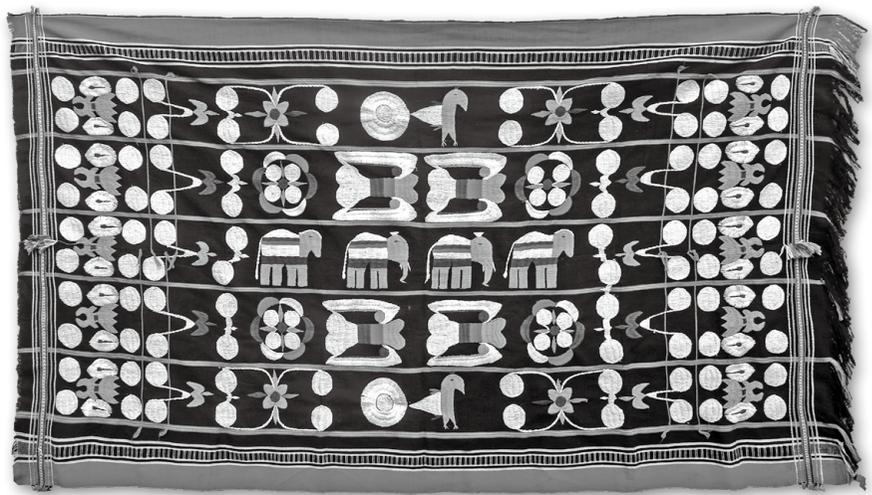
歴史的に見れば、ナガの居住地は、第二次世界大戦末期の通称インパール作戦で激戦地となり、戦後はインドからの分離独立運動が高揚し、インド中央軍とナガ軍との武力闘争によって多くの血が流れた場所でもある。だが、農村に一步足を踏み入れると、そうした凄惨な歴史を忘れてしまうほど、美しい棚田が広がり、まるで時が止まっているかのような長閑な農村社会の暮らしが現在も営まれている。

織物・刺繍の価値と共生社会

冬の晴れた日、農村集落の軒先からは、タン、タンと調子の良い音が響く。暖かな陽射しを浴び、手際良く機織りする女性の姿は、農閑期の風物詩である。わたしが調査地としている人口三二〇〇人ほどのチャケサン・ナガの村では、赤・白・黒や橙・黒・白の配色で、男女の腰巻やショールが織られ、年代を問わず広く実用されている。

彼らが居住する州南部は、ナガのなかでも稲作がもつとも盛んな丘陵地帯である。急斜面の棚田では、現在も機械や役畜は用いられず、村人たちの協働作業によって田起こしや代掻き、田植え、収穫がおこなわれる。こうした雇用関係や階層のない共生社会には相互扶助が不可欠であり、勲功祭宴といわれる、富を配分する宴席の慣習も継承されている。村ではそれを「ゾッティ・トゥムザ」とよび、全村人に三度宴席を提供した夫婦には、刺繍が全面に施されたショール「トゥピク」が贈られ着用が許される。トゥピクは、力の象徴である牛の頭や象、幸福や豊かさを示す孔雀や蝶、星、花のモチーフで彩られ、織物や刺繍

が彼らにとっての重要な資産であることを物語っている。



集落への貢献によって着用が許される刺繍のショール「トゥピク」
(撮影：メリンヴ・ドーロ、提供：ヴェチュロー・カヌオ)

アイデンティティの象徴

半世紀近く続いたナガの分離独立闘争も停戦協定が締結され、二〇〇〇年代に入ると、伝統的なトライブの文化を復興・再評価しようとする動



ホーンビル民族芸能祭で伝統衣装を纏って踊るサンタム・ナガの人びと(ナガランド州、キサマ、2013年)

きが広がった。そして伝統的な織物文化も、あらたな脈絡で都市部の人びとに取り込まれるようになった。その第一の要因は、観光産業の進展とそれに伴う民族芸能祭の興隆である。毎年二月に開催されるホーンビル民族芸能祭には、州政府認定の各トライブから選ばれた村人たちが出演し、トライブや集落独自の配色や模様を施した伝統的な織物を纏い、民謡や舞踊、儀礼を披露する。ここでは多種多様なトライブの文化を一度に見る



伝統的な橙と黒の配色をベストやタイに取り入れたチャケサン・ナガ
(ナガランド州、キサマ、2013年)

ことができるため、出演者だけでなく、農村を知らない都市部の聴衆にとっても、他のトライブとの差異化を意識し、それが自らのトライブ文化を復興させる起爆剤となっている。

また第二の要因は、ミュージシャンやファッション・デザイナーが伝統的なトライブの織物や刺繍を衣装に採用し始めた点である。インドという大国のなかで民族的にも宗教的にもマイノリティとして生きるナガにとって、そうした伝統的な要素は彼らのアイデンティティの象徴として機能している。日曜の朝に、伝統的なトライブの織物をベストやネクタイ、ロングスカートに仕立てたものを身につけ、礼拝に通う人びとの姿はよく見る光景である。伝統と機能性を調和させながら、日常に取り込んでいく彼らの知恵がそこにある。



自宅の軒先で機織りする女性(ナガランド州、ティプス、2015年)

民博の展示では、世界各地の文化や生活を、オセアニア、アメリカ、ヨーロッパなど地域ごとに紹介している。ただし、どの地域も、さらに細かく地域がわかれていたり民族が異なっていたりして、文化や生活は様々ではない。階層や階級による違い、世代や時代による変化も大きい。そしてもうひとつ、ジェンダーによっても生活のあり方は異なる。

生業と性分業

本館の展示はジェンダーというテーマを積極的に意識したものではない。しかし、ジェンダー、特に女性という観点から全体を見てみると、女性の暮らしは地域ごとに違いはあれ、通文化的な共通点があることも見えてくる。そのひとつは、家のなかの領域はどこでもおもに女性たちの活動の場だったことである。筆者が専門としているヨーロッパの展示場には、主食のパンを紹介するコーナーがあるが、家庭でのパン作りは、展示場の写真パネルを見てもわかるように女性たちがおこなっ



B ヨーロッパ展示場のパンのコーナー

大主教など、政治的・宗教的な権威に関する資料からは、この領域の多くは男性に担われていることが浮かび上がる。日本の文化展示場には神輿などの各地の祭りや芸能に関する資料が数多くあるが、それらの使用者の多くは男性である。オセアニアをはじめ各地の展示場にある儀礼用の仮面も同様である。ただし、神々に捧げる供物や祝宴の料理などは女性たちによって準備されることが多い。また、各地の展示をよく見ると、朝鮮半島のシャマンや日本のイタコのよう、宗教や信仰の分野でも女性たちの姿を見つけることができる。たしかに女性の姿は見えにくく周辺化されがちだが、彼女たちはこれらの分野でもさまざまななかかわり方をしているのである。

変化する女性たち

こうした女性たちの生活は今、どの地域でも変わりつつあり、そのことも、展示場のあちこちから見えてくる。例えば、民博では音楽や楽器についての展示も多く、それに特化した音楽展示場もあるが、それらの演奏者はたいてい男性たちである。楽器の演奏はどの地域でも祭礼や儀礼に結びついていたり、専門化・職業化したりするためだろう。ただし現在、女性たちも演奏を楽しむようになってきていることは、解説パネル等で説明されてい

みんぱく回遊

展示場で

ジェンダーを考える

宇田川 妙子
民博超域フィールド科学研究部



中国地域の文化展示
「民族楽器」

F 巫具(ふぐ)(巫堂の服)
(韓国、H0214601ほか)

朝鮮半島の文化展示
「精神世界」

東南アジア展示
「生業」

オセアニア展示
「島での暮らし」

ヨーロッパ展示
「生業と一年」
「宗教・信仰」
「産業化とともに」

D 刺繍見本(学校教材)
(ドイツ、H0272557)



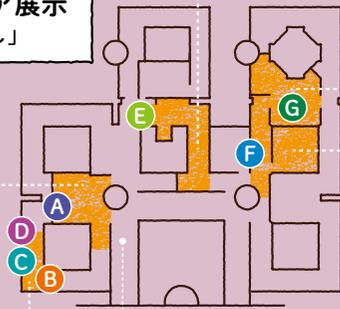
E 女工
(タイ、H0276580ほか)



A 仮面
(バブアニューギニア、H0001351)



C 大主教祭服
(ギリシャ、H0230387ほか)



観覧券売場
本館展示場

Hからはじまる番号は標本番号です。

てきた。他の展示場でも、調理器具について説明する写真パネルには、それを使っている女性の姿が目につく。また、機織りや糸紡ぎなど、衣服にかかわる仕事も、おもに女性たちが携わっており、東南アジア展示場には機織りをしている女性のマネキンが置かれている。そして産業化・近代化の過程で、そうした仕事が家内労働として女性たちの賃金獲得の手段となったり、裁縫や刺繍という形で女性教育にも利用されてきたことは、ヨーロッパ展示場で示されている。

しかし女性は、どの地域でも常に家のなかで過ごしてきたわけではなく、農業などの生業にもかかわらず。本館の展示では、残念ながら男女がどのように仕事を分担し協力してきたかについては明示されていない。生業に関しては、どの地域の展示場でも、写真パネルなどから男性の姿を見ることが多い。ただし女性もさまざまな作業をおこなってきたことは、例えば日本の文化展示場の焼畑や採集などのコーナーで紹介されている。また、東南アジア展示場の入口には、オートバイで工場に働きに出る女性労働者のマネキンがある。

見えにくい女性の姿

一方、権力の場や公の領域では、一般的に女性の姿はさらに目につきにくくなる。本館でも、ヨーロッパ展示場のキリスト教の



G 中国地域の文化展示場のひょうたん笛
(中国、H0237918ほか)

る。特に興味深いのは、中国地域の文化展示場のひょうたん笛に関する写真パネルにあるように、次世代の子どもたちが男女問わず教育の場などをとおして伝統的な楽器に親しんでいる様子である。こうした変化がさらに進んでいくと、将来、展示場の様相はどう変わっていくだろうか。

先に述べたように民博の展示は、ジェンダーを特に意識したものではなく、さらに言えば、各地の文化や生活の様子をものな展示しているわけでもない。しかし、ジェンダーという観点から、それぞれの展示資料が男女のどちらによって作られ、使われているのか、そこにはどんな差や意味があるのかを映像などとともに見ていくと、読み取れることは多く、少なくともジェンダーを考えるための糸口を得ることができよう。民博の展示場は、こうした一見明示的ではないテーマをめぐっても、いろいろな発見をもたらしてくれる。

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症の予防のため、本館関連の催し物について、本コーナーに掲載の情報も含め、急遽、予定を変更する可能性があります。詳細につきましては、決まり次第みんなくホームページに掲載いたします。何卒ご理解のほど、お願い申し上げます。

特別展

「ユニバーサル・ミュージアム さわる！触の大博覧会」

会期 11月30日(火)まで
会場 特別展示館

「身体で聴く」土の音

「触れて打つ、揺らして揺らげ」

研究会 広瀬浩二郎(本館 准教授)
※要事前申込、先着順、参加無料
(会場参加は要展示観覧券)
※手話通訳あり
【申込期間】
11月5日(金)17時まで
左記イベント予約サイトからお申し込みください。
https://entry-reservation-event.minpaku.ac.jp/

「音にさわる」地球の鳴らじ方

フックシヨップ
研究公演「身体で聴く」土の音」の関連企画です。音が鳴る焼きもの作品をつかて、音にさわる体験をします。

日時 11月14日(日)
10時30分～12時30分
②14時～16時

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)
定員 各回10名

講師 渡辺泰幸(造形作家)
永田砂知子(打楽器奏者)

研究会 広瀬浩二郎(本館 准教授)
対象 小学3年生以上
【申込期間】
受付中、定員に達し次第終了。
上記イベント予約サイトまたは往復はがきにて要事前申込。1通につき2名まで申込可能。

「感性を開いて、見えないものを見つめる」

フックシヨップ
アイマスクで自隠しをして、視覚以外の感覚をたよりに粘土をつかった立体作品づくりに挑戦します。完成した作品は、本館エントランスホールで展示します。

日時 11月20日(土)
①10時30分～12時30分
②14時～16時

会場 特別展示館地下休憩所
特別展示室

定員 各回10名
講師 片山博詞(彫刻家)

対象 小学3年生以上
※要事前申込、先着順、参加無料
(大学生・一般の参加者は要特別展示観覧券)
【申込期間】
受付中、定員に達し次第終了。
上記イベント予約サイトまたは往復はがきにて要事前申込。1通につき2名まで申込可能。

考え、語り合います。
日時 11月23日(火・祝)
10時30分～12時
参加形式 オンライン(ライブ配信)
(定員300名)
※会場参加はありません。
※要事前申込、先着順、参加無料
司会 広瀬浩二郎(本館 准教授)
高田(顧問)
解説 斉藤弘美(警女ミュージアム 高田(顧問))
【申込期間】
11月17日(水)17時まで
上記イベント予約サイトからお申し込みください。

特別展会期中の毎週金曜日にはタッチツアー「あの手この手で特別展を楽しむ」(講師 広瀬浩二郎)を開催します。

左記の日に特別展出展者によるギャラリートークを実施します。
11月6日(土) 酒百宏
11月23日(火・祝) 後藤真実

「躍動するインド世界の布」

企画展
会期 2022年1月25日(火)まで
会場 本館企画展示室

「流動化する家族のかたち」

公開講演会
少年高齢社会を文化人類学から考える

日時 11月12日(金)
18時30分～20時40分
(17時30分開場)

会場 日経ホール(東京)
定員 300名
講演 森明子(本館 教授)
松尾瑞穂(本館 准教授)

コメント 大門正克 早稲田大学教育総合科学術院 特任教授
バネル ディスカッション
主催 国立民族学博物館
日本経済新聞社
※要事前申込、先着順、参加無料
※オンライン(ライブ配信)でもご参加いただけます。
※手話通訳あり
お問い合わせ先
本館 研究協力課 研究協力係
06-6877-8209

巡回展
「ビーズアイヌモシリから世界へ」
会期 12月5日(日)まで
会場 国立アイヌ民族博物館
特別展示室
主催 国立アイヌ民族博物館
国立民族学博物館
公益財団法人千里文化財団



刊行物紹介

■上羽陽子、金谷美和 編
『躍動するインド世界の布』
昭和堂 2,090円(税込)

女性が身に纏うサリー、男性が頭に巻くターバン。布は身につけるだけではない。インド世界の布は、場をくぎり、人をつなぎ、神と人の媒介となり、政治をうごかし、グローバル経済をうみだす。インド社会をつくりだしている人びとの営みを多彩な布から迫る一冊。

みんなくウィークエンド・サロン ― 研究者と話そう

※申込不要(当日先着順)、参加無料(要展示観覧券)、14時より整理券配布
※毎回、開始30分前に開場

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域(国)の最新情報」「みんなく」の展示資料」についてわかりやすくお話しします。

11月7日(日) 14時30分～15時15分

神と出会うために
― 礼拝儀礼布ピチュワイー
話者 豊山亜希(近畿大学 准教授)
上羽陽子(本館 准教授)
会場 本館第5セミナー室(定員42名)

11月21日(日) 14時30分～15時

展示の舞台裏
― 始まるまでと、始まってから
話者 園田直子(本館 教授)
会場 本館第4セミナー室(定員30名)

11月28日(日) 14時30分～15時15分

非接触社会から触発は生まれない
― 2025大阪・関西万博に向けて
話者 広瀬浩二郎(本館 准教授)
会場 本館第5セミナー室(定員42名)

先住民アートとして世界的に知られるアボリジニのアクリル絵画。そこには祖先から受け継がれた物語が描かれています。オーストラリアの辺境の土地に生きる人びとが分かち合い、助け合いながら色鮮やかな絵画を生み出していく様をご紹介します。

【申込期間】
■友の会電話先行予約
(定員30名、会場参加対象)
11月15日(月)～19日(金)
【申込先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
■一般受付 11月22日(月)～12月15日(水)



中央砂漠で絵を描くアボリジニ女性たち(2015年)

みんなくゼミナール

参加形式
①会場参加 みんなくインテリジェントホール(講堂)(定員160名)
②オンライン(ライブ配信)(定員300名)
・要事前申込、先着順、参加無料
イベント予約サイトはこちら
https://www.minpaku.ac.jp/event/lecture/seminar
・当日参加受付あり(会場参加のみ、定員30名)

第515回
11月20日(土)13時30分～15時(13時開場)
産後三・七日間の変化
― 韓国の伝統慣習から産後ケア施設まで

講師 諸昭喜(本館 助教)
出産をめぐる儀礼や習慣は文化によって多様です。韓国では産後の母親と新生児に対してどのようなタブーや規範、儀礼が存在したか、そして、現代の産後ケアまで紹介します。

【申込期間】
■一般受付 11月17日(水)まで
※友の会電話先行受付は終了しました。

第516回
12月18日(土)13時30分～15時(13時開場)
アボリジニ・アートはどう描かれるか
講師 平野智佳子(本館 助教)

各イベントについて詳しくは、みんなくホームページをご覧ください。

お問い合わせ 国立民族学博物館 広報・IR係
電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6875-0401
お問い合わせフォーム https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form



友の会

友の会講演会
受付フォームは友の会ホームページ内にあります。当面のあいだ、友の会会員に限定して開催します(要事前申込、先着順)。
※第129回東京講演会は一般参加も受け付けます(会員以外は資料代500円。オンライン配信はありません)。

【大阪】
参加形式
①本館第5セミナー室(定員42名)
②オンライン(ライブ配信)(定員100名)

第518回 11月6日(土)13時30分～14時40分
カフィル・カラ遺跡の食糧庫跡
― 発掘調査成果から考える「食」の過去と現在
講師 寺村裕史(本館 准教授)

ウズベキスタンのカフィル・カラ遺跡では、2017年度までの調査でゾロアスター教関連の木彫り板絵が発見されましたが、その後の発掘で食糧庫と考えられる別の部屋が見つかりました。今回の講演では食糧庫跡の発掘成果を紹介しつつ、出土した遺物(炭化した穀物やクルミ、ニンニクなど)と現在の食べ物と比較しながら、オアシス都市での「食」の過去と現在について考えます。

受付フォーム
https://www.senri-f.or.jp/518tomo/

第519回 12月4日(土)13時30分～14時40分
【企画展】躍動するインド世界の布
着るだけではない布
― 役割や機能に注目して
講師 上羽陽子(本館 准教授)
受付フォーム
https://www.senri-f.or.jp/519tomo/

【東京】
会場 日本点字図書館(東京都新宿区)
(定員40名)、一般:資料代500円

第129回 12月18日(土)10時30分～12時
なぜさわるのか、どうさわるのか
― 触察の新展開をめざして
講師 山本清龍(東京大学大学院 准教授)
広瀬浩二郎(本館 准教授)

「触察」は視覚障害教育の分野で頻繁に使われる用語です。世の中には、さわらなければわからないこと、さわると、より深く理解できる事物の特徴があります。視覚的な観察に偏る現代人の日常生活に「触察」を取り入れることで、どんな変化が生じるでしょうか。野外活動・観光のユニバーサル化に取り組む最新の研究動向を紹介します。

受付フォーム
https://www.senri-f.or.jp/129tokyo/

お問い合わせ 国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp



二度と闘牛はしません

関雄二

民博 人類文明誌 研究部



闘牛に挑んでみました

コンパードレの誘い
どちらかといえば動物愛護者であるわたしが闘牛をする立場に立たされたことがある。今から三〇年も前の話である。



闘牛士の正しい姿勢(カマハルカ、1985年)



闘牛の前座としてスペイン起源の踊りマリネーラが披露される(カマハルカ、1985年)

舞台は、長らくわたしが考古学調査をおこなってきた南米のペルーである。スペインによる植民地化を経て一九世紀に独立した国で、スペイン由来の文化が根づいている。闘牛もそのひとつだが、別の慣習にも触れておきたい。スペイン人がもたらしたカトリック教では、友人などの子どもの洗礼に立ち会い、受洗者の神に対する約束の保証人

として、子どもの宗教教育に責任をもつ男性を代父とよぶ。実父と代父はコンパードレとよび合い、親類以上の関係になることもまれではない。

その代父をわたしに依頼してきたのが闘牛士のペペであった。本来は、カトリック教徒でない代父は務まらないのだが、近年は教会ではなく、家庭で儀式をすませることも多く、代父の資格について気にしない人が多い。ペペは、わたしたちの調査団が当時雇っていた家政婦の兄であり、親交もあったことから、彼の娘の代父を喜んで引き受けることにした。

ある日、ペペから闘牛をしてみないかと、誘われた。ペルーでは、首都や地方都市には常設の闘牛場があり、テレビで中継もされる。小さな村の祭りで仮設の闘牛場が設置されることも多い。調査地のペルー北高地は、牛の牧畜が盛んで、闘牛も人気があった。だ



人生一度限りの闘牛に挑む筆者。当時のビデオより(カマハルカ、1989年)

指を頭に載せ、うなりながら向かってくる。初めは笑っていたが、彼いわく、これが正式な練習方法だそうだ。

「さあ来い」

ひととおり所作を覚えたころ、素人闘牛の日がやってきた。闘牛の参加者は、会場で身分証明書を見せて登録する。登録者の長い行列を見て、参加す

るのはわたしだけではないと安堵するのをつかの間、到着した牛を見るなり血の気が引いた。豚より大きい。動揺しながら入場した。いつの間にか参加者は五人に減っていた。できることならわたしもやめたい。そんなことを思う間もなく、最初の一頭がアリーナに飛び出した。ペペは、ブルダデーロとよばれる防御用の衝立内にわた

しと身をひそめながら、

「あれは大きくて、俺でも無理だ」とつぶやく。「おまえはプロだろ」とわたしもつぶやく。無謀にも牛に立ち向かった素人闘牛士がいた。目の前であつという間に牛に引き倒され、救急車で搬送されていた。これは現実なん

だ。何頭かやり過ぎした後、ペペに押されてアリーナに向かった。耳には「東洋人、いけ」という観客の声がこだましていたが、牛以外は何も、わたしの目に入らなかった。牛が象のようだ。むろん習ったことなどほとんど忘れてただただムレータを掲げ、身体を動かさないように心掛けた。牛は、動くものをめがけて突進してくるからである。

「さあ来い」と強がって声をかけると、牛は本当に突進してきた。掲げたムレータを角で突き上げ、わたしの脇をきわどくすり抜けた。うまくいったぞ。でもムレータが剣に絡まっている。ほどうとする手が震える。反転した牛がもう目の前だ。わたしはブルダデーロめがけて牛よりも速く逃げ戻った。こうしてわたしの闘牛は終わった。長男を出産したばかりの妻からは国際電話でさんざん叱られた。確かに傷害(死亡)保険は効かない。



現在の調査地、パコパンバ村の闘牛場(2012年)



闘牛場は仮設。客席は落ちれば怪我をするほどの高さ(パコパンバ、2012年)

近年、闘牛は動物愛護団体から虐待として非難を浴び、本国スペインですら禁止する州が出てきている。わたしが奮闘した闘牛場も今は閉鎖されている。現在の調査地の村の闘牛も、ピエロが牛をからかうコミカルな形がとられるだけである。やがては、これすら虐待として廃れていくかもしれない。ペペの再就職先は決まったのかな。



友人の娘(ペペとは別の家族)の散髪儀礼で代父になった筆者(カマハルカ、1989年)

沖島漁師、かごを編む

わたなべ けいいち
渡部 圭一
京都先端科学大学准教授

琵琶湖のエビ漁で用いられる小ぶりなかごは、かつて竹で作られていたが、現在ではプラスチック製に置きかわった。しかし、素材がかわってもその形に変化はない。人びとの創意工夫で洗練された形はかわらないものなのだ。

エビタツベ漁師を訪ねて

古いエビタツベをたくさんもっているという、一人のベテラン漁師を訪ねた。行き先は、滋賀県の琵琶湖に浮かぶ有人島、沖島（近江八幡市沖島町）。道具を保管しているという小屋は集落の外れにあるので、徒歩ではなく船で向かう。小屋のなかには、竹製のかご型の漁具エビタツベが文字どおり山と積まれていた。

エビタツベは筥とよばれる漁具の一種で、琵琶湖でテナガエビとスジエビをとるのに使う。一般に横に寝かせて仕掛ける筥を横筥、水底に立てる筥を竝筥というが、エビタツベは後者に当たる。現在ではプラスチック製に変わっているが、もとは竹製のものが広く使われた。琵琶湖以外では目にするのではない、ユニークな形状である。

「ノド」に凝縮されたもの

エビタツベの材料にはマダケを使う。細く割った竹を編み、直径二〇センチメートル程度の輪状にする。底をはめ、漏斗状の口を取り付け、籬で側面を固定すると、円筒形のかご状になる。サイズはびたりと同一の規格である。表面に黒いコーラタールを塗り、その上からペンキで家印を描く。操業中にほかの漁師の仕掛けとからんだとき、すぐ



道具小屋のなかにうずたかく積み上げられた竹製のエビタツベ (撮影：三樹友梨香、沖島町、2019年)

れを何セットも同時に使うので、多いと一軒の保有数は二〇〇〇個を超えることもある。

沖島のエビタツベの漁期は五〜九月。一度早朝のエビタツベ漁に同船させてもらったことがある。漁場に着くと、仕掛けをローラーで引き上げていく。エビタツベはいったん船の胴に積み上げ、そのあとの再投入に備える。このとき安定するようきれいに積むのが大事で、万一風で倒れたりして縄がからまると、ほどくの何時間もかかって仕事にならない。

沖島の漁業者は夫婦で操業することが多い。船べりに立った夫が、水中から引き上げたエビタツベを掴み、手早く蓋を開け、逆さにして中身をあげ



上：現在のエビタツベ漁の様子。道具はプラスチック製に置きかわっている
下：口を開けて獲物を取り出す。このしくみは竹製の時代からかわらない (沖島町付近、2017年)

る。これを隣の妻に手渡す。妻は次の餌を放り込み、船の胴に積み上げる。この間、七〜八秒程度。妻の手が一瞬あいているとみるや、引き上げた道具をそのまま手渡すこともある。無言の連携プレーである。

竹細工をする漁師

琵琶湖では、竹製のエビタツベは今では使われていない。昭和五〇年ごろ以降、プラスチックでできたエビタツベが急速に普及したからである。もともと素材がかわっただけで、形状はもちろん、「ノド」を開け閉めするしくみや、はえ縄式の操業スタイルにはかわりはない。竹製時代のエビタツ

識別できるようにするためである。

エビタツベ作りの知恵が集約されているのは、「ノド」ともよばれる口の構造だ。中央の穴は、スジエビ用の場合、直径一センチメートル程度で、入ったエビが出にくい大きさだと漁師は言う。また見た目ではわかりにくいのが、この漏斗状の部品は蓋を兼ねている。紐を引くと一部がめくられて口が開くしくみである。このしくみは、船上での漁師の作業と密接にかかわっている。

エビタツベ漁の現場へ

琵琶湖の漁撈は、大量の筥をはえ縄式に連結して用いる点に特徴がある。エビタツベ漁の場合、現在は二〇〇個程度を単位として仕掛ける。道具と道具の間隔は一尋半ほど（約二・七メートル）というから、仕掛けの延長は数百メートルに達する。こ



竹製のエビタツベの製作。作り方を記憶している高齢の漁師による再現 (撮影：三樹友梨香、沖島町、2018年)

べが、すでに十分な完成度を備えていたことがわかる。

樹脂製に移行する以前には、エビタツベは基本的に自家製であった。島外のかご屋から買うこともできたが、椽ぎという点では自作が一番である。当然たくさん作れば作るほど、人よりも多くの漁獲量を上げることができる。一方で、水中に長時間沈めることもあって、エビタツベの耐用期間は四〜五年程度と短い。破損した部品の修理もつねに必要なことになる。

そうしたわけだから、エビタツベを作りためておくことは漁のない冬季の重要な仕事であった。道具が一律の規格でできているのは、部品作りと組み立てを夫婦で分担していたことのあらわれだ。漁師は、竹細工職人の顔を兼ね備えていたのである。小屋の古いかごの山は、かつてそこがちよっとした竹細工の工房のような場所であったことを語りかけてくれる。

頭のなかのパンデミック

高木 仁^{たかぎ ひとし}
民博 外来研究員

京阪神エリアは四度目の緊急事態宣言の延長中で、大阪では野戦病院の設立が議論になっているところであった。

あらすじ

映画は、ジャングルの奥地にある軍のキャンプ地での戦闘シーンから始まる。そして映画の題字が出現し、舞台は現代のアメリカの感染症研究施設へと移っていく。映画の主人公はこの研究施設で働いている軍人のサム・ダニエルズ大佐（ダスティン・ Hoffman）と疾病予防管理センターに勤める元妻のロビー・キオ（レネ・ルッソ）である。

研究施設はザイル（現コンゴ民主共和国）で発見された感染症への対応に大忙しであった。これまでにはない史上最悪のモーターバ・ウイルスが見つかり、施設では最悪のレベルを示す第四警報が発令されていた。軍部所属のサムや相棒のケイシー・シュラー中佐（ケビン・スペイシー）らが現地へと飛ぶが、到着したザイルの村はすでに感染症に侵され、ほとんどの村人が命を落としている悲惨な状況であった。「木を伐り過ぎた我々に天罰が下った」。村の呪術師は焼き払われた村を眼下に、そう叫んでいた。

ウイルスの危険性を案じたサムは、上司のビリー・フォード准将（モーガン・フリーマン）に全米にも警戒通達を出す必
まり、さまざまな噂や論評、攻撃的なことばが飛び交った。多くの者が疲弊し、精神が少しずつ弱まっていくなかで、わたしたち自身が現実世界の出演者となった。ぼさぼさの頭髪によれよれのTシャツ、量産型マスクを身につけて互いを監視するような生活が実演されていった。

本作は公開から二六年後の今、エンタメという本来の目的から少し離れて、わたしたちの頭のなかのパンデミックについていろいろと教えてくれるように思う。確かにホラー作品としても秀逸で、観るものに驚くほどの恐怖を与えてくれるが、現代の多くの視聴者は本作から、以前に感じたものとはまったく異なる種類の恐怖を感じると思う。そして、かつてのわたしたちがいかに感染症の流行や生物災害について無理解だったかを教えてくれる。

現在、人類による自然への介入は地球規模のものから野生種の栽培化、極小の遺伝子操作にまで至り、その諸相も宇宙への人工衛星の打ち上げから稀少動物の利用に至るまで幅広い。わたしが研究しているカリブ海のインディアンの地においても、海亀の人工孵化、栽培化がおこなわれている。感染症の流行やバイオハザードについてもまだまだ知らないことがたくさんありそうである。

感染症とわたしたちの想像力

本作は、一九九五年に製作された、アメリカ合衆国で未知の感染症の恐怖と向き合った人びとを描いた作品である。発表された当初から刺激的なテーマが受けて人気を博し、興行収入的にも世界各地で大成功を収めた。

わたしたちの暮らす現実世界でも二〇二〇年の春先から感染症が流行する兆しを見せ始めた。その後、わたしたちはとても長い自粛生活を強いられるようになった。本当に長い期間を感染症とともに過ごしてきた。本作を選んだのはそうしたなかで、感染症の流行や生物災害（バイオハザード）に身を置く以前のわたしたちが、その現象をどのように予測していたのか、その脳内を垣間見ることができ
鑑賞したのは二〇二二年八月三十一日、

「アウトブレイク」

原題：OUTBREAK
1995年／アメリカ／英語／129分／DVDあり
監督：ウォルフガング・ペーターゼン
出演：ダスティン・ホフマン、レネ・ルッソほか



右：カリブ海の孤島、英領ケイマン諸島にて人工孵化・栽培・飼育化される野生の海亀(2018年)
左：カリブ海のインディアンによる海亀の漁獲(2015年)



コンゴ民主共和国の森とコンゴ川。今日、人類と自然は接近しつつある。森は開発が進み、人家が目立つようになった(撮影：池谷和信、2014年、左上は航空写真)



コンゴ民主共和国ではサルは食料として市場で売られている(撮影：池谷和信、2014年)

要があると進言するが、現地では一応の封じ込めに成功したとして却下される。しかしその後、この病原体を保持した一匹の猿がザイルから密輸されてアメリカ国内へと入り込むと、感染は急拡大していく。本編はその後二転三転のストーリー展開を見せるが、続きは本編にて。

想像と現実のギャップ

さて、問題はわたしたちが感染症の流行やバイオハザードをかつてどのような現象だと想像していたのかである。大多数の人は、そんな非日常が実際に起こるなどこれっぽっちも思っていなかったと思う。わたしもそう。そのようなものは映画やゲームのなかの話だと思っていた。しかし、実際に感染症の大流行が起こると、それは映画よりもっとゆっくりと進行していった。そして長い長い自粛生活が始

所有表現の いろいろ

おかもと すすむ
岡本 進

東京外国語大学大学院博士後期課程

「所有」って何だろう？ 日本語だったら「あなたの本／目／お父さん」のように助詞「の」であらわすし、英語だったら「ユア・ブック／アイズ／ファーザー」のように所有代名詞であらわす。このように、もち主や関係性の所属先などをあらわすのが所有である。しかし、よくよく考えてみたら何か変だ。たしかに同じ「の」や「ユア」を使ってあらわすものの、「あなた」はけっして「目」や「お父さん」を「本」と同じように所有しているわけではない。本と違って、目やお父さんは誰かに譲ったり貸したりできないし、自分の思いどおり支配できているわけでもない。

わたしの研究している言語は南太平洋で話されているフィジー語、そのなかでもバトゥレ島というところで話されている方言である。人びとは温かくおおらかであるが、この言語は所有表現について非常にうるさく区別する言語だ。まず、誰かに譲ったり貸したりできるものの所有は「レム（あなたの）」を用いて「レム・イボラ（あなたの本）」のようにあらわす。これは英語の所有代名詞と似ている。しかし、目やお父さんのように人にあげられないものの所有にレムは使えない。目は「マタ」であるが、あなたの目は「ムマタ」である。一方、お父さんは「タマ」で、あなたのお父さんは「タمام」となる。おわかりいただけたかもしれないが、「ム（あなたの）」が単語自体にくっついて所有をあらわしているのだ。さらに詳しくいうと、目のような身体部位の所有の場合には単語の前に「ム」が

あらわれ、お父さんのような家族の所有の場合には単語の後ろにくっつく。

もう少し別の例を見てみよう。「あなたの魚」は「ケム・イカ」、「あなたのお茶」は「MEM・チー」という。魚もお茶も人にあげられるものなのに、「レム」ではなく「ケム」と「MEM」というまた違った「（譲れる／あげられる）あなたの」が使われている。じつは、「ケム」は食べ物の所有を、「MEM」は飲み物の所有をあらわしているのだ。「レム・イカ」ともいえるが、この場合は「あなたの（食べる目的ではない）魚」という意味になるので注意が必要だ。

日本語や英語だったら「の」や「ユア」だけですむところを、フィジー語はいちいち違う表現を使っていて面倒だと思われたかもしれない。しかし、本当は日本語だって他人事（他語事？）ではないのだ。2匹の犬、2頭の牛、2台の車、2軒の家、2枚の紙、2杯のビール……。挙げればきりがなが、日本語には助数詞というものがある。システムとしては、フィジー語の所有表現はこの助数詞に似ているといえる。名詞の特徴（誰かに譲れるかとか、そのものの形や大きさだとか）によって、異なる所有表現や助数詞を選んでいるのだから。もしわたしが（あるいはあなたが）日本語母語話者でなかったとしたら、日本語の助数詞ってややこしいなあと思っただろう。月並みだが、異なる言語を知るということは、自らの母語がどんなしくみなのか知ることと表裏一体なのだ。

『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく 2021年11月号

第45巻第11号通巻第530号 2021年11月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 三島禎子(編集長) 池谷和信 上羽陽子

岡田恵美 齋藤晃 吉岡乾

制作・協力 公益財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、再生産可能な大豆由来のインク、環境に配慮したFSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



月刊みんぱく

2021年

11月号

編集後記

子どものころ、母や祖母、叔母たちに連れられて布屋によく行ったものである。それが習い性となったのか、気がつくとならば調査地でもあれやこれやと布を物色している。

わたしの研究はモノよりは人が対象なのだが、みんぱくに来て、「モノを追いかけてゆくと人が見えてくる」と現館長に言われたことがきっかけになり、アフリカンプリントの周辺を調査した。収集にも行く機会があり、いろいろなデザインの布を集めた。

じつはこのアフリカンプリントは西欧諸国とアジア、アフリカ、西インド諸島を巻き込んだ世界資本主義のたまものである。西欧で創られたアフリカらしいデザインの布がアフリカ市場へ輸出され、今日では「アフリカの」モノとして受容されている。

アフリカンプリントが貿易品として定着する以前、アフリカ市場にも西欧諸国をとおしてインドの布が入ってきた。企画展「躍動するインド世界の布」では衣服に限定されない布の役割や機能が紹介されるという。とても楽しみである。

(三島禎子)

次号の予告 12月号

特集「塩——人類の知恵と想像力」(仮)

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

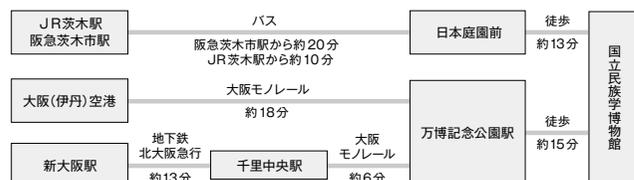
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は翌日が休館日)
年末年始(12月28日~1月4日)



主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



日本万国博覧会記念公園シンポジウム 2021

人類・いのち・万博

—1970 から 2025 に向けて

EXPO'70 が生み出したレガシーである万博記念公園と国立民族学博物館が協働してシンポジウムを開催します。「人類の進歩と調和」をテーマとした EXPO'70 から、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマとした EXPO 2025 への展開をふまえ、「人類・いのち・万博」をテーマに、EXPO2025、さらにその先の未来について議論します。

【登壇者】

西尾章治郎（大阪大学総長）

ウスビ・サコ（京都精華大学学長）

山極壽一（総合地球環境学研究所所長）

井上章一（国際日本文化研究センター所長）

吉田憲司（国立民族学博物館長）

【日時】

11月23日（火・祝）

13時～16時40分（12時30分開場）

【場所】

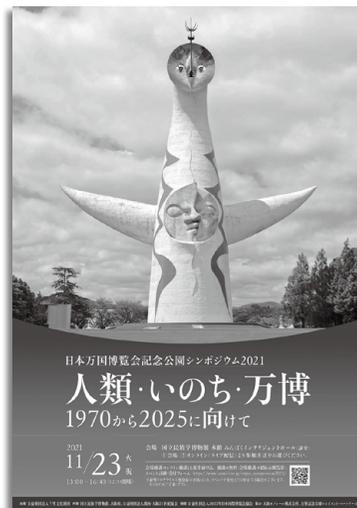
国立民族学博物館

みんなくインテリジェントホール（講堂）

参加方法は、会場、オンライン（ライブ配信）よりお選びいただけます（会場参加は要展示観覧券）。

詳細・受付フォーム：https://www.senri-f.or.jp/expo_symposium2021/

※受付期間 11月16日（火）まで（要事前申込・先着順）



【お問い合わせ】公益財団法人 千里文化財団
06-6877-8893（平日9～17時）

ミュージアム・ショップおすすめ商品

特別展・企画展関連商品のご案内

国立民族学博物館では特別展「ユニバーサル・ミュージアム」、企画展「躍動するインド世界の布」を開催中です。ミュージアム・ショップでは、図録などの書籍のほか、関連商品もとりそろえています。



【特別展関連】

ユニバーサル・ミュージアム
トートバッグ 1,300円（税込）

2022年（令和4年）
ポケットカレンダー 770円（税込）



【企画展関連】

みんなくオリジナルカレンダー
1,320円（税込）

『季刊民族学』178号
特集「布と人」2,750円（税込）

【お問い合わせ】国立民族学博物館ミュージアム・ショップ e-mail：shop@senri-f.or.jp